

志高錬成

～志を高く持ち、
よりよい成果を得るために、
粘り強く自分を鍛える～



令和8年9月8日 13号

佐久市立浅科中学校 文責：中島

『「くれない族」って言葉、知っていますか？。皆さんにとって大事な事だと思います…』

2学期が始まって2週間が経ちました。みなさんの中に「休みモード(?)」の人はもういませんよね？。2週間後には浅科中最大の行事である「清流祭」が行われます。「清流祭」に向け、いろいろなところで準備が進んでいると思います。まずは、自分に任された仕事をきちんと進めましょう。文化祭初心者(?)の1年生は先輩にどんどん聞いて活動を進めましょう。そして、3年生は、自分たちが「創り上げる」という意識を大事にし、活動を進めて欲しいと思います。

さて、今回の「志向錬成」ですが、文化祭のネタにしようかなあ…とも思いましたが、ちょっと違う話を載せたいと思います。突然ですが、みなさんは「くれない族」って言葉を聞いたことがありますか？。今回は、その「くれない族」っていう人たち(?)の話です。もしかすると、みなさんのなかにも「もしかすると、自分は『くれない族』なんじゃないか」って思う人がいるかもしれませんね…。でははじめに、下の文を読んでみてください…。

もう10年にもなるだろうか、会社などの中堅スタッフで交わされる若者論議の中に「くれない族」の存在が話題になったことがある。こうした一括りの熟語に若者を押し込めて総括してしまうのはそれなり危険でもあり、場合によっては分かりやすい分だけ誤った方向を示してしまう恐れもあるけれど、けっこう本質を突いている言葉として覚えている。「くれない族」とは、いわゆる指示待ちの状態に止まっていることを当たり前だと理解している若者集団を一まとめに表現した言葉である。つまり「教えてくれない」、「指示してくれない」、だから「私はできないのだ」と答える若者が多いことを嘆く言葉であり、この「…くれない族」の意識はやがて「ヒントを与えてくれない」とか「やる気を起こさせてくれない」という相手を批判するスタイルにまで発展し、当時の指導的立場にいた中堅幹部職員の顰蹙(ひんしゅく)を買うことになる。

そうした若者に対する中堅幹部の言い分はこうである。要するに若者がそうした「くれない」を連発するのは「どうしたら一番楽に仕事ができるか」が根底にあるからであり、そうした考え方に対して教える側としては「それは君たち自身が考えなければならないことではないのか」と言いたいのである。そして時は流れた…。

ところでくれない族は今でも健在だが、どうやら最近のくれない族は昔のスタイルからは大きく変貌してきているようだ。「助けてくれない」、「やってくれない」という考えがどうやら慢性的な症状を見せ始めているような気がする。かつてのくれない族には、少なくとも意識の上では「教えてくれさえすればきちんと後は自分でやる」という背景と言うか基本があったような気がする。そうした流れがいつの間にか「全部くれない」にってしまったような気がしてならない。一番の「くれない」は、「自分の人生の指針となるべき生涯の仕事を誰も見つけてくれないこと」である。そんなのは他人(ひと)から与えられるものではなく、「自分で見つけるもの」だし、むしろ「自分で育てていくもの」だと私なんかは思っているのだが、鍵付きテレビ付きの個室で食べ物にも小遣いにも不自由なく育てられた若者としては、自分で見つけるなんぞと言うそんなまどろっこしいことはしてられないのである。

大体が、心から欲しいと思うものがない。思い悩んでねだる前に両親は黙っていてもクリスマスプレゼントやら誕生祝などにかこつけて見境なく与えてくれた。おもちゃもゲームもパソコンも携帯電話も、自力でバイトしてでも獲得しようとか家事の手伝いなどをして自力で取得できる環境を作り出そうなどの努力をする前に、ある日突然に目の前に自動的に湧いてくるのである。つまりは挫折の体験がないのである。成功体験とまではいかないまでも、失敗とか我慢とか辛抱などといった人として当然にありうる体験は遠い物語の世界なのである。だからと言って幼児から青年に成長する過程で、願いが必ず叶うという保証のないことに子はやがて少しずつ気づいてくる。自分の思い通りにならない様々なことにぶつかることになる。

困難にぶつかったことなど、これまで経験したことなどない。我慢も同様である。ましてや努力することなんてしたことすらないのだから無理である。だとすれば逃げるしかない。本能的に危険や破綻を察知し、そこから避難するのである。逃げても保護者は常に受け入れてくれる。いやいや、危険に立ち向かおうとするそのこと自体、保護者は許してなどくれないのである。

そんな身に、仕事や生涯設計だけは自己責任だとホッポリ出されたからといって、そんなに簡単に乗っかっていけるわけではない。ましてや職場や社会と言う他人集団に入ってしまったらなお更のことである。そうしたとき、一番手軽なのが他人(ひと)のせいにするのである。結果が悪かったのは自分のせいではなくそうさせた他者が悪かったからである。計画がその通りに進まないのは、計画の良さに対する実行者の実力がついていけないからである。時に成功する者がいたとしても、それはその人の実力なんかじゃない。場合によっては私の力や他の人の努力の横取りだし、たまたまラッキーが重なっただけである。

さてもう一歩進んで考えるなら、「私の挫折」は、そうした挫折するような作業そのものを与えた相手が悪いのである。成功するための安全なレールを敷こうとしなかった立案者が悪いのである。だとすればそうした作業にその気になってチャレンジしたことこそが挫折への入り口になる。チャレンジがなければ失敗もない道理である。もちろん成功もないかも知れないが、これまでの経験からするならば成功や満足はいずれ誰かが助けてくれるだろうし、そのうち天から降ってくるかも知れない。その時までじっと危険を避けながら首をすくめて生きていくのにこしたことはない。

恋愛も地球環境も、「今の私」が安穩と過ごしていくことにそれほど関わりがあるとは思えない。みんなと同じ服装をして、みんなと同じ携帯を持ち、「なんとかなる」空間に首すくめて生きているだけでいい。それでもうまくいかない場合があるかも知れないが、それは社会の責任なのだから誰かが何とかしてくれるだろうし、なんとかするのが政治や社会の責任である。

そうした思いに引きずられていく若者の気持ちが分からないではない。管理社会に首までどっぷり漬かって生きていかなければならない現代人にとって、危険や冒険などは物語の世界だけで十分であり、下手に我が身に取り込んだところでリスクだけ降りかかってくるのが関の山である。そうした気持ちは私自身にだってちゃんと根付いていることくらい検証しなくたって分かる。ただそうした若者から次の世代が生まれてくるのである。若者からしか次の世代は育っていけないのである。大人も子供も「怒り」やすく、「クレ」やすい時代になってきている。それだけ辛抱することの力が失われていっている証拠でもあるのだろう。他者を責め続け、最後は国に「なんとかせい」と言い続ける風潮の背景には、「くれない族」の変貌と蔓延が影響しているような気がしてならない。特効薬はあるのである。「少しの我慢」・・・このワクチンがどうしても必要な時代になっているのではないかと、少しの間も急かされているようにメールを打つことにしがみついている若者を見るにつけ、へそ曲がりな老税理士はつい感じてしまうのである。

みなさんは、上に載せた文章を読んで、どんな感想を持ったでしょうか？。みなさんにとってはちよいとキツめ？の文章だったかもしれませんね。簡単に言えば、自分で努力をしない者が、上手いかなかった責任を転嫁し「自分は悪くない。悪いのは〇〇だ！」と言っている人＝「くれない族」なのだと思います。上の文章を読んで、私も強くそう思いました。厳しい言い方をすれば、みなさんはあと数年で「権利」という名の「自己責任」を背負って生きていくことになります。「権利」は「義務」とセットで成り立つものです。3年生は「公民」という科目で詳しく勉強しますので、その時に思い出して下さい。どんなに言い訳をしても、それを決めたのはみなさん自身であり、「人のせい」にはできないのです。また、「人のせい」にするのはとても簡単です。でも、それって何かを良くすることにつながるでしょうか？。みなさんも少し考えてみて下さいね。また、私は上の文章から「特効薬は『少しの我慢』」という言葉が印象に残りました。過ぎた時間は戻りません。この機会に自分は「くれない族なのかどうか？」って考えてみて欲しいと思います。そして、自分が「くれない族」だと思ったそのあなた！。今の自分には何が必要なのかをぜひ考えて欲しいと思います。

【連絡】

- ・先週末のPTA作業に関して、多くの保護者の方に参加して頂きありがとうございます。今後とも、本校の教育活動に関するご理解とご協力、よろしくお願いいたします。
- ・今月のSCの来校日は10日(木)となっています。希望のある方は担任または教頭まで連絡をお願いします。